

緊急

高温による水稲の品質低下防止対策と病害虫防除の徹底について

備中県民局農林水産事業部
備南広域農業普及指導センター

7月上旬以降高温が続いており、今後の気温も高いことが予報されています。早生品種は高温により、平年より早く出穂が始まっています。また、中生・晩生品種は分けつ盛期～幼穂形成期で、概ね順調に生育しています。

登熟期の高温は、白未熟粒などの高温障害が多発生する原因となります。また、高温で緩効性肥料の窒素成分の溶出が早まると、登熟期に窒素不足となり高温障害を助長する場合があります。

今後の気象情報等に十分留意するとともに、高温障害を回避するための技術対策の徹底をお願いします。また、斑点米カメムシ、特に、稲を不稔にするイネカメムシは、出穂期直後が防除時期になるので、地域の発生状況に応じて防除の徹底をお願いします。

1 水稲の生育状況と病害虫防除の徹底

(1) 生育状況

- ・早生品種は、出穂が平年より早く始まり、茎数は平年並～少ない。
- ・このまま高温傾向が続くと、早生品種の成熟が早まると予想される。
- ・中生・晩生品種は、分けつ盛期～幼穂形成期で、茎数は平年並～やや少ない。

(2) 病害虫防除の徹底

① 斑点米カメムシについて

- 「斑点米カメムシの防除を徹底してください！」(植物防疫情報第5号 令和6年7月18日付)
- ・病害虫防除所によると、赤磐市の予察灯における斑点米カメムシの誘殺数(6月～7月1半旬)は平年より多く、過去10年間で2番目に多い。
- ・主要発生種により防除時期が異なるため、植物防疫情報第5号を参考に防除を徹底する。
- 斑点米カメムシのうち、近年被害が問題となっている「イネカメムシ」は、出穂期の穂を吸汁し、稲を不稔にする。
- ・不稔対策の防除適期は、出穂期直後であり、穂に直接薬剤がかかる液剤の防除効果が最も高い。越冬成虫は7月頃から水田に飛来し、出穂した水田に次々と移動して加害
- ・産卵を繰り返すことから、地域の発生状況に応じ「その被害は、イネカメムシが原因かも(令和6年1月作成)」のチラシを参考に、的確な防除を実施する。

② トビイロウンカについて

- ・県内で、トビイロウンカの飛来は確認されていない(7月23日現在)が、近隣の複数県で飛来が確認されている。長期残効性箱剤を使用していない場合は、特に今後の発生状況に十分な注意が必要である。

③ コブノメイガや紋枯病等について

- ・高温年には、コブノメイガや紋枯病などの病害虫の発生が多いので、予察情報やほ場観察など十分に留意して的確な防除を行う。
- ・特に、コブノメイガにより葉に食害を受けると登熟不良を招き、玄米品質が大きく低下する場合がありますので、ほ場での発生状況を確認して、発生が確認された場合は早期に防除を行う。

2 登熟期の高温による玄米品質への影響

(1) 白未熟粒の多発

- ・登熟期の高温により白未熟粒が増加する。品種毎の多発する条件は次のとおり。
※岡山県農業研究所主要成果より抜粋

○あきたこまち

- ・出穂 10～30 日後の日最高気温の平均値が 31℃を超えると白未熟粒の発生率が高くなる。33℃を超えると顕著に増加する。

○コシヒカリ

- ・出穂 5～25 日後の日最高気温の平均値が 31℃を超えると白未熟粒の発生が急増する。

○きぬむすめ

- ・出穂後 20 日間の日平均気温の平均値が 25.5℃以上になると白未熟粒の発生が増加する。

○ヒノヒカリ

- ・出穂後 25 日間の日平均気温の平均値が 25℃以上になると白未熟粒の発生が増加する。

(2) 胴割れ米の発生

- ・登熟初期（出穂後 10 日間）の日最高気温が高いほど胴割れ率が増加する。

3 高温障害を回避するための技術対策

(1) 早生品種

①実肥の施用

- ・出穂後でも極端に葉色が低下している場合は、実肥（穂揃い期）として、窒素成分で 1 kg/10a 程度施用する。
- ・ただし、遅い時期の追肥は、玄米蛋白質含量を高めて食味が低下する場合がある。

②高温時のかけ流し及び夜間かん水等による地温低下

- ・出穂後の水管理は通常は間断かんがいであるが、高温が続く場合には、用水が豊富な地域ではかけ流しや夜間かん水等を行い、地温を低下させ根の活力維持を図る。
- ・用水が不足し干ばつが懸念される地域においては、湛水状態が維持できるよう努める。

③早期落水防止による玄米品質の維持

- ・早期落水は、未熟粒や屑米、胴割れ米、茶米の増加につながるため、出穂後 30 日頃を目安にできるだけ落水を遅らせる。

④適期収穫の実施

- ・刈り遅れは、胴割れ米や茶米等が増加して玄米品質低下の原因となる。
- ・登熟期間が高温で経過すると、予想以上に成熟期が前進することがあるため、出穂後の積算気温等を参考にするとともに、登熟の進み具合（青味粳率）を随時確認して、早めに収穫作業の準備を行い適期収穫に努める（表 1）。

表 1 早生品種の収穫適期の目安

品 種	あきたこまち	コシヒカリ
出穂後の日数	35～45	35～50
積算気温 (°C)	850～1,100	950～1,200
青味粳率 (%)	15～10	

(2) 中生・晩生品種

①適正な穂肥の施用による稲体の活力維持

- ・粳数が増えすぎると「乳白粒」が発生しやすいので、過繁茂で葉色が濃い場合は 1 回目の穂肥を減らすか、穂肥を遅らせて粳数過剰を抑える。

- ・登熟期の窒素不足を回避するため、基肥一穂肥分施体系では、栽培暦どおり2回目の穂肥（出穂前10日頃）の施用を徹底する。
- ・全量基肥一発肥料（肥効調節型肥料）であっても、栽培期間中の高温・多照の影響により肥効が早期に切れることが予想される場合や葉色が低下している場合は、生育状況を見て追肥を行う。

③穂ばらみ期～出穂期の水管理

- ・幼穂形成期～穂ばらみ期までは、根腐れを防止するために浅水管理とするが、穂ばらみ期～出穂期は、茎葉からの蒸散が多く、水分が不足すると幼穂の成長にも影響し、一番水が必要な時期であるため深水管理が基本となる。
- ・用水が不足し干ばつが懸念される地域においては、この期間に湛水状態が維持できるよう努める。